

**主 題：キリストの弟子として歩むとは①**  
**聖書箇所：ルカの福音書 14章25-33節**

皆さんおはようございます。このようにして再び皆さんの顔を見られることを心からうれしく思っています。アメリカでの2年目の生活を振り返ればいろいろなことがありました。学びの面においては神学や説教などを取り始めたので1年目に比べてより深く濃いものとなりました。また生活面では山火事であって避難しなければいけないなど、これまでにない経験をしました。長いようであつという間の1年でしたが、神はどんな時も変わらず、ご自身のすばらしい恵みを示し続けてくださったことに本当に感謝な1年でした。また浜寺の家族のひとりひとりの皆さんが財政面、また祈りによってサポートしてくださっていることに本当に感謝しています。皆さんの祈りを覚える時、それが私の本当に大きな励ましになります。いつもありがとうございます。このようなすばらしい家族を私の人生の中に与えてくださった神にいつも感謝しています。

**☆ キリストの弟子として歩むとはどういうことなのか**

さて、感謝なことに、再び皆さんとみことばを学ぶ機会を与えられました。この話をいただいた時から今回は何を学べるかといういろいろ考えましたが、最終的には一つのことが僕の頭の中に浮かびました。それは私自身が昨年1年間を通して考えさせられた一つのシンプルな質問です。「キリストの弟子として歩むとはどういうことなのか」ということです。もし皆さんが人に伝道していて、では具体的にイエスの弟子として従っていくということはどういうことなのかと尋ねられたとすれば、どうお答えになるでしょうか。また実際、ここにいる多くの皆さんがキリストの弟子として歩んでおられると思いますが、皆さんの周りの人、家族や友人、同僚はあなたがキリストの弟子として歩んでいる姿をはっきりと見て取ることができるでしょうか？あなたのうちにあるキリストがそれらの人々に明らかに示されているでしょうか？聖書は私たちにキリストの弟子として歩むことがすばらしいことであると教えてくれています。私たちの人生の中で最も大切な選択はキリストを自分の救い主と受け入れ、主と認め告白し、そして信頼し、このお方の栄光を現すために生きていくことです。

イエス・キリストに従う、その歩みにのみ私たちの本当の喜び、平安、希望があるのです。しかし私たちはキリストの弟子として歩むことの本当の意味をわかっているでしょうか？キリスト者の歩みはよくマラソンに例えられます。パウロもピリピの中で目標を目指して一心に走っていると語っています。マラソンにしても、いかなるレースにしても、スタートがありゴールがあります。しかし、もしあなたが間違ったスタート地点からスタートして、たどり着いたところが本当のゴールでなかったとすれば、私たちにとってそれほど悲しいことはありません。どれだけ練習したとしても、あなたがスタートの位置を間違っているとすれば、その練習は意味をなさないのです。

きょうともに学ぶルカ14：25-33では、イエスはとても直接的に、また明確にキリストの弟子として歩み出すスタート地点はどこかということ、そしてそのスタート地点、キリストの弟子として歩むということは大きな犠牲を伴うのだと教えてくれています。ここは多くの皆さんが知っているテキストでしょう。しかし、同時にこのテキストは私たちの心に問いかける最も厳しい箇所だと思います。ある人は余りにもこの箇所が厳しいので、まるでルカ14：25-33がなかったかのように無視しています。またある人は余りにもこのスタート地点が厳しいので安易なスタート地点を探し回っています。しかし、私たちが知っていることは、このテキストが神のメッセージだということです。キリストの弟子として歩む時、それには犠牲が伴うのだと。これ以外に正しいスタート地点はありません。ですからどうか一度皆さんひとりひとり自分の信仰を吟味してみましょう。いま一度キリストの弟子として歩むことが一体どういう意味なのか、またどういう犠牲を伴うものなのかをともに考えてみましょう。どうかこのみことばがあなたの信仰を確認するだけでなく、あなたの励ましになることを願っています。またもしこの中にまだキリストに完全に従っていくという決心をされていない人がいるならば、どうかこのみことばがあなたの助けとなることを願っています。

**ルカ14：25-33**

：25 さて、大ぜいの群衆が、イエスといっしょに歩いていたが、イエスは彼らのほうに向いて言われた。

：26 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。

：27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。

：28 塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちひとりでもあるでしょうか。

:29 基礎を築いただけで完成できなかつたら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、  
:30 『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかつた。』と言うでしょう。  
:31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずずわって、考えずにいられましょうか。  
:32 もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。  
:33 そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。

## ◎ みことばの背景

非常に明確なメッセージがここに記されています。まず具体的にキリストの弟子として歩むことがどういうことなのかを考える前に、どんな人たちに向かってイエスがこのメッセージを語られたのかということを見たいと思います。ルカは25節に「さて、大ぜいの群衆が、イエスといっしょに歩いていましたが、イエスは彼らのほうに向いて言われた。」と記しています。この時イエスは自分が十字架に架かることになるエルサレムに向けての旅の途中でしたけれども、男性も女性も老人も子どもも、文字どおりたくさんの人がイエスと一緒に歩いていました。この群衆の多くはイエス・キリストがほかの誰とも違う特別な人物であるということに気づいていました。同じルカ9：18-19では「さて、イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちがいっしょにいた。イエスは彼らに尋ねて言われた。『群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。』彼らは、答えて言った。『パプテスマのヨハネだと言っています。ある者はエリヤだと言い、またほかの人々は、昔の預言者のひとりが生き返ったのだとも言っています。』」と書いています。群衆の多くは何か特別な力、特別なものがこの人にあることに気づいていました。そしてこの人について行けば何か特別なものが見られるのではないかと、何か不思議なことが見られるのではないかと期待を持って彼らはイエスについて行っていたのです。残念ながらこの人たちの関心、動機は自分の興味を満たすことで、彼らは本当の意味でキリストの弟子ではなかつたのです。ここで大切なことはイエスの本当の弟子として従うことと、単に取り巻きとしてイエスについて行くだけの者とは全く異なるということです。イエスは本当の弟子を求めておられたゆえに、この人たちの方を向いて本当の弟子というものが一体どういうものなのかを教えられ始めたのです。

### A. イエスの本当の弟子として歩むとは

イエスが本当の弟子を求めておられるその姿勢は今の時代も変わりません。イエスは私たちひとりひとりも本当の弟子として歩むことを求めておられます。では具体的にキリストの弟子として歩むことがどういうことなのかを三つのポイントから考えてみたいと思います。

#### 1. 何よりもキリストを愛する 26節

##### 1) 両親や家族よりも

一つ目のポイントは、何よりもキリストを愛することです。26節「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。」と書いています。キリストの弟子になりたいのであれば、自分の家族を、また自分のいのちさえも憎まなければならないのだと。聖書の別の箇所にはこのようなことも書かれています。出エジプト20：12では「あなたの父と母を敬え。」、またレビ19：18では「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。」と。またイエス・キリストもマタイ22：39では「『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。」と書いています。しかし、イエスが26節で言ったわたしについて来るなら、「父、母、妻、子、兄弟、姉妹」、すべてを憎むというのと、これらの教えが相反するものでないことを私たちは知っています。ここでイエスが言わんとしたことは、イエスの弟子になりたいのであれば、自分が最も愛するものよりもイエスを愛さなければならないということです。

マタイ10：37がわかりやすく説明してくれています。「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。」とあります。聖書はここでAを愛しBを憎みなさいと教えていないということです。私たちは、当然私たちの家族、親を愛するべきです。しかし、私たちがキリストを愛する愛というものを考える時に、キリストへの愛が一番トップに来なければいけないのだとイエスはここで言っているのです。イエスご自身は同じことをルカ16：13で「しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということではできません。」と警告しています。

##### 2) 自分のいのちよりも

私たちのイエスに対する愛は、私たちの中で最も優れたものでなければいけないのだと教えています。そして両親や家族を憎むのと同じように私たちは自分のいのちさえも憎まなければいけないのだと書かれています。これは自分自身を愛する思いに対して死ななければならないと言っているのです。皆さん

も知っているとおりに、人は生まれながらに自分のことが大好きです。それがゆえに自分がこうしたいという思いどおりにならなかった時に私たちは憤りを覚え、文句を言ったりするのです。私たちは生まれながらに自分を愛する存在です。私たちがキリストを愛する時、私たちがキリストを愛して行こうとする時に、自己中心的で自分の利益を求めようとする自分に対する愛を絶対に両立することはできません。

キリストの弟子として歩んで行く時、そこにはキリストだけを愛し、そして彼のためだけにすべてを捧げる犠牲が必要なのだとここで教えているのです。

## 2. 自分の十字架を背負う 27節

二つ目のポイントは自分の十字架を背負うということです。続いて27節「自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。」とあります。二つ目のポイントもはっきりしています。自分の十字架を背負わなければキリストの弟子にはなれないのだということです。

### 1) 十字架

「自分の十字架を負う」というのはどういうことでしょうか。そのことを理解するためには、「十字架」というものがこの当時の人々にとってどのような意味を持っていたのかということをもう一度正しく理解しなければいけません。1世紀ローマの十字架は人々にとって最も残忍な刑として考えられていました。多くの医師は今もなおあらゆる死刑の中で最も残酷な処刑方法だと言っています。ローマ帝国に対して最も卑劣な犯罪を犯した者、テロリストや謀反を犯した人への処刑方法として用いられていました。十字架刑では即死することはありませんでした。両手首、両足首を縛り、もしくは釘で打ち付けられ、死ぬまで放置されるのです。そして時間がたてばたつほど、自分のからだを自分で支えられなくなっていき、そして呼吸困難に陥って苦しみながら死んで行くのです。その余りの苦しみのゆえに、多くの受刑者たちは発狂してしまうというようなものでした。

また十字架が持つ痛みというのはこれだけではありません。受刑者は自分の十字架を背負って死刑場まで運んで行かなければいけなかったのです。その途中、町の通りを通っていくのですが、両端には人が出てくるのです。人々は受刑者を見てあざけり、またけなしたりしました。これは死の行列と呼ばれたりしますが、要するに公の場で受刑者がどんな罪を犯したのかを明らかにし、その人が辱めを受けることを目的として行われました。十字架を運ぶということは生半可なものではありません。この当時の人々にとって、十字架というものは直接死を意味することばでした。

### 2) 自分自身に対する死：新しい人としての歩み

これを踏まえた上で、イエスについて来た人々を少し想像してみてください。彼らは、イエスが不思議な力を行うことを楽しみにして来たのです。その人たちに向かってイエスは、あなたが本当に私の弟子になりたいのであれば十字架を背負ってきなさいと言ったのです。想像にたやすいと思います。彼らの表情はどうだったでしょう？ どう考えてもその中で笑みを浮かべられる人はいなかったと思います。むしろその基準が余りにも厳しいがゆえに多くの人には心を打たれたことでしょう。キリストの弟子として歩むということ、自分の十字架を背負うということ、言い換えれば自分自身に対する死ということです。かつてイエス・キリストを知るまでの私たちは自分の思うまま、自分の願うとおりに生きていました。エペソ2：3には「私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」とあります。かつての私たちは罪と罪過の中に死んでいました。サタンを喜ばせ滅びへと向かって歩んでいたのです。しかしその私たちがキリストは恵みによって救ってくださったのだと、エペソ2：4-5で言われています。「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちがキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——」と。

キリストに従って歩んで行こうとする時、私たちはこれまでと同じ生き方をすることはできません。私たちは神の前に悔い改め、神が求める生き方をしていかなければならないのです。古い自分には終わりを告げ、神が求める新しい人としての歩みをして行く責任があります。特にこの27節の教えを考えるに当たって注目する点が三つあります。

#### (1) 従うということは個人的なもの

イエスは「自分の十字架を負って」と言われました。イエスは友人や家族、だれかほかの人の十字架を負ってきなさいと言わなかったのです。これは、キリストに従うという選択は個人のものであって、だれかほかの人が代わりにしてあげることはできないということです。だれかほかの人に言われたから、自分で従って行くという決心をするのではないということです。あなた自身にイエス・キリストに従うという選択の責任があるのだと言っているのです。

#### (2) 従うというのは継続的なもの

十字架を「背負う」ということばは、ギリシャ語で継続を表す現在形の動詞が用いられています。また同じルカ9：23でも「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そ

してわたしについて来なさい。」と記されています。ですから十字架を負って従っていくという選択は一回だけのことではないということです。私たちは継続的に、日々自分の十字架を負って主に従って行かなければいけないということをここから見ることができます。

### (3) 従うというのは無条件なもの

イエスはここで自分の十字架を負ってついてきなさいと群衆に言われました。そこには、従えばこういことが与えられますとか、従うことによってこのようなことが起こりますという条件は記されていません。この教えは、当時の人たちにとってもそうだったように、私たちにとっても同じです。私たちはこの先イエスに従って行くがゆえにどんな困難に直面するか、どんな犠牲を払わなければいけないのかわからないけれども、どんな時にあっても神に信頼して従って行くことが求められているのです。

### 3. 犠牲を伴うことをしっかりと考えなさい 28-33節

三つ目のポイントは犠牲を伴うことをしっかりと考えなさいということです。28-33節に二つの例え話を用いてイエスは説明を加えています。

#### 1) 表面上だけキリストに従う人 28-30節

一つ目の例え話は28-30節に記されています。「塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちにひとりでもあるでしょうか。基礎を築いただけで完成できなかつたら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかった。』と言うでしょう。」と。ここで言わんとしていることは明白です。だれでも建物を建てようとする時、まず建てる前にどれぐらいの費用がかかるかを計算しなければいけないということです。そしてもしそれをしないで建て始めて、後々建てられなかつたと気づく、そういう人は無責任で愚かな人だと笑われてしまうということです。この例えは表面上だけキリストに従う者を表しています。今日の教会の中で残念ながらこのような人が多くいることを見受けます。最初は福音を喜び救いを心から求め、イエスに従っているように見えます。教会に来ていろいろな働きに加わるかもしれません。しかし悲しいことに、それらはすべて外面的なものであって、実際に心の中ではイエス・キリストを知らないのです。そしてイエス・キリストと個人的な関係がないがゆえに困難や試練があつたら、教会から離れて行ってしまいます。本当の意味でこういう人たちはキリストの弟子ではない。自分自身のすべてを捧げてはいないということです。

もし、本当のキリストの弟子として歩むならば、私たちはその費用というものを考えなければいけません。それはもしかしたら自分が持っている人生プランかもしれません。キリストの弟子として歩む時、もしかしたらその計画を変更しなければいけないかもしれません。その費用というものは私たちが持っている財産かもしれません。キリストの弟子として歩む時、その財産がなくなってしまうかもしれません。その費用というのは私たちの持っている快適な生活かもしれません。キリストの弟子として歩む時、そのことによって私たちの快適な生活はなくなってしまうかもしれません。私たちはあらゆるものを犠牲にしなければいけないのだと。もしかしたら自分がこれだけは大切にしたいと思うものすら神は取り去られるかもしれません。どんな費用がかかつたとしても私の主であるイエス・キリストに信頼し、従って歩んで行くのです。どんな場所、どんな時、どんな状況にあつたとしても本当の弟子はキリストにすべてを捧げて従って歩んで行くものです。

#### 2) キリストに完全に自分を捧げていない人 31-32節

二つ目の例え話が31-32節にこう記されています。「また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましようか。もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。」と。この例え話のポイントは1万の兵力を持つ王が2万の兵力を持つ王に戦いを挑むということは圧倒的な戦力差から考えて愚かなことだと。ここで1万の兵力を持つ王はキリストに完全に自分を捧げていない人のことを表しています。また2万の兵力を持つ王、引き連れて向かって来る王は圧倒的な力を持つ絶対的な主権者であるイエス・キリストのことを指しています。イエスは人々にわたしは必ず帰って来て、神を信じていない、神に敵対する者をさばくのだと警告しています。そしてこのキリストを信じて従うという、そこにグレイゾーンはありません。どちらかだけです。キリストのうちにある者なのか、それともキリストの外にあつてキリストの敵として歩む者なのか。私たちは今イエス・キリストと和解ができる時にそのことを考えなければいけません。キリストが和解の案を提示してくださっている今、私たちはキリストを自分のこととして受け入れ、そしてキリストにすべてを捧げて歩んで行くという決心が私たちに求められているのです。

#### 3) すべてのものの究極的所有者はイエス・キリストである 33節

そして最後に33節が二つの例え話をまとめてこう言っています。「そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。」と。これはキリストの弟子

になるために自分の持っているすべてのものを売り払わなければいけないということではありません。ここでイエスが言わんとしていることは、イエスの弟子として歩む者、イエスの弟子として歩む者が持つものすべて究極的な所有者はイエス・キリストなのだということを認める必要があるということです。イエス・キリストの弟子として歩む者、その者の持つ時間、その者が持つ財産、その者が持つ体、その者が持つ人生そのもの、それらすべてがあなたのもではなく、主イエス・キリストのものだと認めるということです。あなたがかつて自分のものだと思っていたものもすべて、イエス・キリストの弟子として歩む時に、あなたのもではなくなるのです。私たちの主人、主イエス・キリストのものだということです。キリストの弟子として歩む時、それは多くの犠牲を伴うものです。だからこそイエスはここでしっかりとその費用を考えるようにと教えたのです。

私たちもそのことをしっかりと考えなければいけません。なぜならイエスは別の箇所でも『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいる』（マタイ7：21）わけではないと言われました。「狭い門からは入りなさい。」（ルカ13：24）とも言われました。「狭い門」というのは大勢で入ることができないのです。ひとりひとりの自分の選択で入って行かなければいけないのです。イエスの弟子として歩む時、多くの犠牲を伴うかもしれませんが、しかし私たちが求められているのは、主イエス・キリストにすべてを捧げて従っていくことです。

## B. イエス・キリストがどのようなお方なのか

では、私たちはキリストの弟子として今実際に歩んでいるのでしょうか？そのことは私たちひとりひとりが考えなければいけない大切な質問です。

さてこれまでイエスの教えをともに見てきました。今皆さんの心の中にはどのような思いがありますか？もしかすると、ある人の中には悲しみがあるかもしれません。ある人の中にはこんなに厳しい基準を満たすことは絶対できないと、そのような思いがあるかもしれません。またある人はそんなに犠牲を払わないといけないのなら、イエスの弟子になる必要はないと考えている人もいるかもしれません。そこで最後残った時間、皆さんとともに考えたいことは私たちの主人、主イエス・キリストが一体どのようなお方なのかということです。私たちがキリストに払う犠牲を考える前に、私たちが覚えなければいけないのは、主イエス・キリストが私やあなたに何をなしてくださったのかということです。

ヨハネ1：1は「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」と言っています。またヘブル1：3は「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。」と言っています。聖書が明確に教えることはイエスは神なのだということです。偉大な力があり、主権者であられるお方、主の主、王の王なのだということです。

また、彼はただ神だったわけではありません。彼は同時に完全な人間でした。ヨハネ1：14は「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。」、またピリピ2：6-7「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができずには考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。」とあります。神であるお方イエス・キリストは人としてこの世に来られたのです。神のひとり子としてこの世に来られたイエス・キリストの目的は、私たちが罪の呪いから解放し、救い出すためでした。

皆さんも好きな箇所の一つだと思いますが、ヨハネ3：16は「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」と言っています。神は世を愛してくださったとこの箇所は教えますが、そもそも私たちにそのような資格があったのでしょうか？そもそも私たちは神に愛されるような存在だったのでしょうか？いいえ、そうではなかったのです。私たちは神に逆らい、神の栄光を現すために造られたにもかかわらず、その目的から外れて生きていたのです。神の完全な義の前に正しいと認められる人はひとりもいなかったのです。ローマ3：10は「義人はいない。ひとりもない。」と言っています。だれひとりとして神に愛される資格を持つ者はいませんでした。むしろ自分の罪のゆえに、罰を受ける存在でした。自分の力や努力で、そのような罰やさばきから逃れることは決してできません。そこには一つの希望もなかったのです。しかし、驚くことに主はそんな私たちを愛してくださいました。1ヨハネ4：8-10は「愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」と言っています。イエス・キリストは、神の愛の結果、神のご計画にのっとって、十字架に架かってくださいました。本来罪のない神の子羊は最悪の罪人のために用意されている十字架に架かる必要は全くありませんでした。どうして力ある神が、主の主、王の王であられるお方が人のために十字架にかかる必要があったのでしょうか？どうして神が造った被造物である人間に辱めを受

けられる必要があったのでしょうか？全くなかったのです。

しかし、イエスはみずから進んで十字架に架かり、私たちの罪のくびきを負って代わりに罰を受けてくださったのです。そしてその結果、私たちの罪は赦されたのです。イエスは十字架の上でご自分の救いのみわざを完成されました。しかし、それで終わったわけではありません。イエスはご自分で言われたとおり墓に葬られ、そして三日目によみがえられたのです。パウロは1コリント15：17「そして、もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。」、そして同じ20節で「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」と言っています。キリストは死の力に完全に勝利され、天へと戻られたのです。私たちの主は生きておられるのです。そして再び栄光を帯びて帰ってきてくださることを私たちは期待して待つことができますのです。このイエス・キリストが、私たちの知っているイエス・キリストです。

聖書を見た時に、このイエス・キリストを知った者の反応がどのようなものか知っておられますか？ルカ5：10でイエスに私について来なさいと言われた時、ペテロやアンデレは11節「彼らは、舟を陸に着けると、何もかも捨てて、イエスに従った。」とあります。パウロは人間的に考えれば最もすばらしいものを持っていましたが、イエスに出会ってからピリピ3：7-8で「しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。」と言っています。キリストの弟子として歩んだ信仰の勇者たちはキリストを知ることのすばらしさのゆえに、それを知った瞬間すべてを捨ててキリストに従ったのです。彼らはキリストに従っていく歩みの中にかかる犠牲を少しも厭おうとはしませんでした。彼らはキリストに従うことのすばらしさをわかっていたのです。

問題はあなたはどうかということです。あなたはキリストを知ること、従うことのすばらしさを心で理解されているのでしょうか？確かに自分を捨ててキリストを愛するという事は難しいことかもしれませんが、しかし、私たちが覚えなければいけないことは、キリストはあなたのためにご自分を捨てて、死んでくださることで愛を示してくださったのです。確かに自分の十字架を日々負って歩いていくことは難しいことかもしれませんが、しかし、覚えなければいけないことは、キリストはご自分には全く罪がないにもかかわらず、あなたのために十字架を負い、代わりに罰を受けてくださったということです。確かに自分のすべてを捧げてキリストにすべてを委ねて歩いて行くことは難しいことかもしれませんが、しかし、キリストはあなたのためにすべてを捧げてくださったのです。そしてそれだけではなく、キリストは力ある主権者、栄光に満ちた神で、ほかの誰にもできなかった死の力を打ち破り、そして今なお私たちとともに、私たちの助け主としていてくださるのです。人間的に考えれば確かに難しいことでしょう。しかし、キリストが私たちのために何をなしてくださったのかを覚える時、私たちは喜んで自分をその主に捧げていきたいと思わないのでしょうか？

さて、このメッセージに対するあなたの応答、このキリストに対する応答とは一体何でしょう？自分を捨てずこれまでと同じような生活を続けるという選択でしょうか？犠牲を考えずにこれまでどおり、ただ上辺だけでイエスについて行っているような群衆と同じような歩みを続けるのでしょうか？それとも自分のすべてを捨て、すべてを捧げ、そして主だけを愛し、主にどんな時も信頼して、キリストの本当の弟子として歩いていく選択をされるのでしょうか？中途半端な選択はありません。自分のために生きるか、キリストのために生きるか。その選択しかないのです。そしてその選択の責任は、私たちひとりひとりにあるのです。主はご自分の本物の弟子として歩まれる人たちを喜ばれます。主はその人たちを喜ばれるだけではなく、その人たちに対するすばらしい報いを約束してくださっています。どうか私たちひとりひとりもう一度自分の信仰を確かめてみましょう。初めにも言ったように、スタート地点が間違っていれば、正しいゴールにたどり着かないのです。私たちは自分が本当に正しいところからスタートしたのかを日々しっかりと考えなければいけません。

もしこの中にまだイエス・キリストにすべてを捧げて従うという決心をしておられない方がいるのであれば、どうかきょうをその時にしてください。先週、地震が起きましたが、私たちはいろいろなことが起きることを知っているのです。選択できる権利がある今、私たちは自分で主に従って行くという決心をしなければいけません。どうかキリストの本当の弟子としてともに歩いて行きましょう。私たちの従っているイエス・キリスト、その方はすばらしいお方です。私たちはそのすばらしいお方に希望を置くことも、そのすばらしいお方に助けを求めることも、そのすばらしいお方にどんな時にも従っていくこともできるのです。どうかひとりひとり継続してあなたの主の栄光を現すために歩いていきましょう。